【國語学入門講座】

キリシタン資料

池上禎造

資料はわれわれの使ふものである。逆にこれにひきずりまわされたり、或はその陰にかくれたりしてゐてよからうはずが無い。凡そ言語資料といふものは、研究対象たる言語の一つの相をあらはしはするが、研究者は自己の生きた言語体験を基として息を吹き込んでいつて、はじめて生かされてくるのである。この息の吹きこみ方が一番大切な問題であつて、どんな珍らしい文献が発見されるかといふことは少し別の話になる。入門講座に「資料」が取上げられるとなると、「資料」の意義について特に一言する必要を感じさせられるのがわれわれの学界の現状である。といつて勿論、色々の犠牲を払つてかくれた文献を見つけ出し、整理し紹介し、殊に学界に提供するやうな営みの重要なことも言ふまでもないが、このやうな目的の方には本稿では言及し得ない点が多いと思ふ。（例へば翻字論などもまじめに取上げねばならない。）

キリシタン資料といふ「通り名」が古くからあつたわけではないが、考方としては大体一致して或る一群のものをさすやうになつてきた。室町時代末期、一五九〇年代から三四十年間、カトリックの宣教師の日本における布教はめざましく、殊にジエスイット派（イエス会）は主として九州で学校を建て印刷を行つた。その刊行物を中心に、ドミニコ会のもの（外地出版）や、この教徒の文書類までも含めて、凡そ室町時代の国語資料となり得るものを総称する。国語学の伝統として国語資料を重んじたから、狂言等の国内の文学資料と、抄物（本誌X）と相並んで天草本の平家伊曾保等は甚だ珍重されたのである。しかし、文語で書かれてゐるものも語彙の資料として、更に文体の資料として取上げることができる。又一面、直接日本語についての著述もあるのである。

このやうな資料の整理は明治の末頃からと考へてよい。歴史家や宗教史家が触れてきたのを、新村出博士が南蠻文学或はキリシタン文学の名で括られたあたりを第一の時期と考へることができる。（博士の諸著の中で、岩波講座日本歴史の南蠻文学は最も要を得てゐる。）資料はだんだん見つけ出される一方、橋本進吉博士の「吉利支丹教義の研究」のやうな語学中心のものに始り、土井忠生博士の諸論考（その多くは「吉利支丹語学の研究」にまとめられる）において純語学の分野がかためられたのである。

この資料の特徴の一つは、刊行されたものが多いにも拘らず、江戸時代の禁教のために失はれて、残存するものは極めて少く、

それも多くは海外にあるといふ点で、名のみは知つても実物の写真すら見得ぬ場合が多かつた。また平家や伊曾保のやうに一般向のするものは原文のローマ字を漢字仮名交文に翻字して刊行されて、大分人々の渇を医すが、用途によつてはこれでは困ることもある。まして多くの教義書の如き、更に語学書の如きは、専門の者といへども見る便宜の無い場合が多かつた。また或るものは、見ることができてもポルトガル文やラテン文のために訓めないやうなこともおこる。かやうにして、多くの人が直ちには利用できない状態が長くつづいた。

第二の特徴として、かやうな書物の成立の事情は案外よくわかる場合があるが、とにかくそのためにも、当時のキリシタンの活動全般について眺めておく必要がある。しかもその結果わかることは、これらの書物はただ不用意に日本文で出版したのでなく、色々の研究考慮の上で用語も整へてある場合が少くない。自然のままの言語でなく反省を経た言語資料といふべき面があるのは注意を要する。

そこでまづ、当時のキリシタン全般についての概観としてカトリック大辞典の第一巻のキリシタンの項がよい手引になる。単行本としては新村博士の日本吉利支丹文化史（昭和十六年）が要を得てゐる。信徒の組織のこととか、宣教師に自分の行為を詳しく語つて懺悔する習慣とか、教義関係のものを読むには色々の彼等の生活を知らねばならない。次にそれでは刊行物はどのくらゐ今知られてゐるか。さうして国語資料となるものはどのくらゐあるか。それについても詳しくは同辞典にゆづらねばならない。国語資料としては、日本語で書いてあるもの（ローマ字と仮名交文と両方）、日本語について書いてあるもの（日本語の部分はローマ字で、地の文はポルトガル語やラテン語で）の両種があり、前者は教義書と教外書とに分けられる。後者は文典や辞書である。

原本の日本国内にあるものはジエスイット版では数種にすぎずドミニコ版は今少しある。戦後所蔵者も少しはうごいてゐるが、上智大学の書誌「キリシタン文庫」（正及補二）は便利である。国外のものも写真は大分集められたので、東洋文庫、上智大学、天理図書館などで大体俤はうかゞふことができよう。更に手近に見、或は備へ得る主なものをあげる。

【複製】ドチリナキリシタン（一五九二　橋本　吉利支丹教義の研究別冊　一六〇〇　大毎吉利支丹叢書）　金句集（吉田　天草本金句集の研究所収）　羅甸日対訳辞書（国会図書館　刊行準備中）　コリヤード日本語文典（大塚訳同書中本文）

【翻刻】サントスの御作業（高羽　国語学資料）　どちりなきりしたん（一六〇〇　国字　岩波文庫）　ぎや・ど・ぺかどる（古典全集）　サカラメンタ提要附録（キリシタン研究第一輯）　ロザリヨの修業（一六二二　高羽　国語学資料未完）　伊曾保物語（高羽　同）　落葉集（高羽　同）

【翻字】サントスの御作業（姉崎　切支丹宗教文学　高羽　国語学資料　両者合セテ完）　ドチリナキリシタン（一五九二　橋本）　ヒデスの導師（姉崎　切支丹宗教文学）　コンテムツス・ムンヂ（姉崎　同）　サカラメンタ提要附録（キリシタン研究第一輯）　コリヤード懺悔録（姉崎　切支丹迫害史中の人物事蹟）

平家物語（亀井　天草本平家物語）　伊曾保物語（新村　天草本伊曾保物語）　金句集（吉田）

かう見てくると目ぼしいものは大体うかがへるわけで、日葡辞書もバジェスの仏訳改編本が今縮写複製されようとしてゐる。朝日の古典全書にも関係書が予定されてをり、金沢大学の高羽五郎氏の奇特な労は更に続けられるであらう。

さて以上のやうなものを用ゐて室町時代の言語を考へるについては前掲の橋本・土井両博士のものを二つの頂点とみることができるが、前者と同じ様式では吉田澄夫氏の金句集の研究があり土井博士は更に国語科学講座中の一册近古の国語のやうな仕事にも向はれた。

ローマ字文献が相当多いので、これによつて音韻の研究が容易になつたのは言ふまでもない。オ列長音の開合やジヂズヅの所謂四つ仮名など、室町から江戸へかけての音韻の推移はキリシタン本で一つの解釈に到達した。更に文典によつて裏づけられる。音声についても「セ」は口蓋化した「シェ」が京都の雅かな発音であるとか、「エ・オ」はそれぞれヤ行風に・ワ行風に発音されたとかいふ点などになると他の仮名の資料の及び得ない問題であつた。清濁や連声の如きもこれによつて教へられることが極めて大きい。殊に国語の清濁の古い方面は、まづこれを足がかりにせねば進めないぐらゐ大切な資料である。しかしながら、彼等の刊行書は規範意識のつよい標準的な言語を用ゐてゐる。ローマ字綴りの如きも刊本では多少の出入がある程度に統一されてゐる。一旦写本になると差が見られるのである。手近のもので村上直次郎博士翻刻のドミニカの説教（カトリック研究第二輯）がそれでありかの平家伊曾保の巻末語彙集に更に書き込む大量の語彙の綴りは著しい。土井博士によればバレトの筆らしいが（国語国文二一―九）四つ仮名の区別もうたがはしい程に違つてゐる。これを思ふとき、文典の記載などの裏づけのあるものはまだよいが、ただローマ字書だといつて直によろこんでしまふやり方は、尚慎重を要するかに思はれる。また印刷の常として誤植も当然予想すべきであるが、殊にドミニコ会の海外版の如きはそれの懸念が多い。コリヤードの懺悔録はアクセント符号らしいものまでついてゐるが、われわれの行つた共同研究の結果では、直ちに生かせないことがわかつた。

語法については翻字本でも利用できるので、伊曾保を用ゐての春日博士の「国語史上の一劃期」は注目されたものであり、湯沢幸吉郎氏は平家の語法を調査された。（国語学論考）マラスルの用法などもここに明かになつた。文典によれば活用やてにはや敬語に至るまで、日本人の意識を反映した形のものになつてゐて人々の注目するところであるが、土井博士の部分々々の紹介があるにすぎない。次に大量の文語文献は、他の領域においても文語の研究のされてない現状ではやむを得ないが、文語資料としてこれから使へるであらう。例へば金句集の本文と和げ、平家の元の本と天草本といつた対照に手がかりをつけて行くことができる。作られた文語は、辞である接続詞などにわざとらしい姿が出たりすることも一例である。

語彙については改めて言ふまでもない。日葡辞書はその語の使はれる場合の注もある場合があり文中の用例も豊富で当時の辞書として出色のものである。語の意味がぐんぐん変つて元の漢字では感じが出ないやうな場合、中世人は宛字も自由にするかと思へば又案外保守的である。進退は後の身代、問訊は問ひつめられてつまること、述懐（ジュツ）はなげくことであるが国字本では元の字である。このやうな点についても色々の資料を供すると思ふ。

キリシタン文献が西国でできたための方言的要素も昔から懸念され、若干の論考もある。しかし、それとともに、われわれはこの資料から、人造の偶然的な、或は規範にすぎた要素をより分ける要があるやうである。始めはこの珍しい資料に接するだけで十分満足できたのが、今日は、右のやうな点まで考へてよいぐらゐに見方も進んでゐる。ましてドミニコ会側のものは、この点特に考へさせられることが多いのである。

——京都大学教授——